

2009 年 5月 10日 アメリカのコロンビア大学バーナード学院にて
国際シンポジウム「東アジアの文化遺産―その普遍性と独自性―」発表論文

東アジアの茶道と茶の湯

中国社会科学院日本研究所準教授 張 建立

はじめに

一 「茶道」の語の初見

- 1 「茶道」の語の原意
- 2 「茶道」の内容の変遷
- 3 中国の茶道の独自性

二 朝鮮半島における茶道の受容

- 1 「茶道面」の語について
- 2 朝鮮茶文献における「茶道」の用例
- 3 朝鮮の茶道の独自性

三 日本における茶道の受容

- 1 日本文献における「茶道」の用例
- 2 「茶の湯」の語意の変遷
- 3 日本の茶道の独自性

おわりに 東アジアの茶道と西洋の紅茶文化との比較

はじめに

茶道は、東アジア諸民族がさまざまな交流を通して蓄積してきた大切な共同文化遺産である。「茶道」の語は中日韓三カ国で共通的に使われている用語であるが、「茶の湯」の語は日本の独自の用語である。しかも、日本では、「茶道」の語が使われる前に、「茶湯」あるいは「茶の湯」の語もすでに広く使われていた。今日でも、「茶道」の語は広く一般的に使われている一方、「茶の湯」の語も日本で根強く生き残っている。「茶道」と「茶の湯」とはどのような違いがあり、言葉としていつから使われるようになり、その意味内容が時代や国などによってどのような変化があったのか、また中日韓三カ国の茶道の独自性がどこにあるのか、といった疑問に対して、これまでの東アジア茶道研究では、歴史的な考察をへた上での明確な答えは、いまだに得られていない。

本報告では、東アジアの文献における「茶道」の語の初見及びその意味内容を歴史的に考察することによって、中日韓三カ国における喫茶文化の「普遍性」と「独自性」を簡潔に分析し、さらに世界的な視野から、西洋の紅茶文化との比較により、東アジアの喫茶文化を観照してみたい。

一 「茶道」の語の初見

1 「茶道」の語の原意

「茶道」の語の初見は、中国唐代の僧皎然（760年前後在世）の漢詩「飲茶歌誚崔石使君」と封演の『封氏聞見記』である。中国ですでに「茶道」の語が使われていた頃、朝鮮半島や日本では、まだ喫茶が行われていたかどうかさえ、史料で確認することはできない。

『全唐詩』に収録されている僧皎然の漢詩「飲茶歌誚崔石使君」に

越人遺我剡溪茗、採得金芽爨金鼎。素瓷雪色縹沫香、何似諸仙琼蕊漿。一飲滌昏寐、情來朗爽滿天地。再飲清我神、忽如飛雨灑輕塵。三飲便得道、

何須苦心破煩惱。此物清高世莫知、世人飲酒多自欺。愁看畢卓瓮間夜、笑向陶潛籬下時。崔侯啜之意不已、狂歌一曲驚人耳。孰知茶道全尔真、唯有丹丘得如此。

とあり、また、やはり『全唐詩』にある皎然の詩「飲茶歌送鄭容」には、

丹丘羽人輕玉食、採茶飲之生羽翼。天台記云：丹丘出大茗、服之羽化。名藏仙府世空知、骨化雲宮人不識。雲山童子調金鑪、楚人茶經虛得名。霜天半夜芳草折、爛漫緇花啜又生。賞君此茶祛我疾、使人胸中蕩憂慄。日上海爐情未畢。醉踏虎溪雲、高歌送君出。

とある。しかし、このような喫茶を詠んだ漢詩だけでは、彼の言っている「茶道」の意味内容を具体的に明らかにすることはなかなか難しい。

一方、『茶經』で知られる陸羽と同時代の人である封演の『封氏聞見記』（『茶道古典全集』第一巻）に

楚人陸鴻漸為茶論、說茶之功效並煎茶炙茶之法、造茶具二十四事、以都統籠貯之、遠近傾慕、好事者家藏一副、有常伯熊者、又因鴻漸之論広潤色之、於是茶道大行。

とあるように、封演は陸羽の茶を「茶道」と呼んでいる。

陸羽茶道の内容なら、『茶經』によって、十分に知りうる。周知のように、『茶經』は上・中・下の三巻十節からなっているが、その内容は次の四つに大別することができる。

一、製茶の内容。茶の栽培を記した「一之源」と「八之出」、茶園の立地や茶産地・茶の採摘や調製・貯蔵等の内容を記した「三之造」と「二之具」である。

二、喫茶の内容。喫茶の道具を記した「四之器」、喫茶法を記した「五之炙」と「六之飲」、それから喫茶の場及びその場の変化に応じた道具の取り合わせの変化を記した「九之略」である。

三、喫茶の功能。これを記したのは「七之事」である。この喫茶の功能は二つ挙げられる。

- 1 単なる物理的な功能。つまり茶そのものが人間の体を健康にする功能
- 2 社会的な功能。つまり喫茶の行為を通じて身を修め心を養うなどといっ

た功能

もっと簡潔に言えば、一つは「養生健身功能」、いま一つは「養心修身功能」といえよう。

四、茶道の習得方法。いわば喫茶の機能を十分に発揮するために、どのようにしてその製茶と喫茶の方法を把握するかを説いたものであり、それが「十之図」である。

以上、陸羽の唱えた茶道の内容を確認した上で、逆に皎然のいう茶道の内容を再検討してみると、「采得金芽爨金鼎。素瓷雪色縹沫香」、「霜天半夜芳草折」等の詩句は製茶や喫茶を詠んだ内容、「一飲滌昏寐、情来朗爽滿天地、再飲清我神、忽如飛雨灑輕塵。（中略）孰知茶道全尔真、唯有丹丘得如此」、「丹丘羽人輕玉食、採茶飲之生羽翼」、「賞君此茶祛我疾、使人胸中蕩憂慄」は喫茶の養生健身機能を詠んだ内容、「三飲便得道、何須苦心破煩惱」は明らかに喫茶の養心修身機能を詠んだ内容である。『茶経』ほど詳しく述べないが、内容的には皎然のいう茶道も陸羽の唱えた「茶道」と同じものだったとみてよいであろう。

陸羽がその自伝の中で「與吳興釈皎然為縑素忘年之交」（「陸文学自伝」、『茶道古典全集』第一巻）と記したように、陸羽と皎然とは極めて親密な友人でもあったし、茶道に対する考えもそれほど違いはなかったと考えられる。「楚人茶経虚得名」という詩句や『封氏聞見記』の記述などを併せて考えると、当時、中国では、『茶経』に記されていた四つの内容は、茶道に対する世間の共通認識ともなっていたものと思われる。

即ち、茶道史の視点から考えると、現時点では、『茶経』に記されていた四つの内容は陸羽の「茶道」の内容であると同時に、本来の茶道の語がもつ内容でもあったわけである。つまり、「茶道」の原意とは、養生あるいは養心を目的とする製茶・喫茶の技法と精神的な理念であると考えられる。

2 「茶道」の意味内容の変遷

ところが、中国では、唐後期から元までの現存文献の中に「茶道」の語が見

当たらない。

ただし、日本に最も大きな影響を与えた蔡襄の『茶録』や徽宗の『大観茶論』などの茶書の内容を検証してみると、喫茶の機能についてはさほど論じられていないが、茶の調製、とくに喫茶法に対してさらに探究した記事が多くなり、茶筴や点茶の語も現れてくる。つまり、「茶道」の語は使われていないものの、内容的には陸羽の茶道と一脈通ずるところがあると認めるべきである。

「茶道」の語が再び文献に姿を現すようになるのは、明代の茶書からである。

例えば、張源の『茶録』（布目潮風『中国茶書全集』汲古書店 1987年）に「造時精、蔵時燥、泡時潔。精、燥、潔、茶道尽矣」とある。張源の『茶録』に記した茶道の内容をみれば、喫茶法は陸羽の点茶法に対して瀹茶法をとっているものの、陸羽からの「製茶・喫茶・喫茶の機能」といった茶道の内容を間違いなく継承しているが、しかし右の記述からも伺えるように、明代以降、茶文献に使われている「茶道」の語は単なる茶を製造、貯蔵、煎じる際の技術を意味するようになり、茶の精神性は抜けていた。

それから現代になって、日本茶道は世界的に知られるようになる一方、茶文化の母国である中国では、膨大な茶史料が残されているが、しかし様々な事情によって、研究は随分と遅れている。数少ない研究者には製茶の技術者が多くて、その研究内容もほとんどが製茶法だけに集中していた。20世紀 80年代頃、台湾の茶業関係者は、「茶道」の語が中国唐時代からすでに使われたのを知らないこともあって、中国茶文化に関して茶道という語を使うと、日本茶道への追随と見られるのが嫌で、「茶道」のかわり、「茶芸」の語を作り出し、中国全土を流行らせた。近年、茶文化史研究の進展により、研究者たちは中国茶文化に関して「茶芸」より「茶道」の語を積極的に使うようになっている。

3 中国の茶道の独自性

中国の茶道の独自性といえば、大きく二点指摘できよう。

一、中国は茶の原産地であると同時に、喫茶文化の発祥地でもある。世界の東西に関わらず、すべての喫茶文化は、中国茶道をルーツとしていること。

二、中国の茶道は、現代の茶芸をも含めて、その精神性もよく説かれているが、しかし、ほとんどは日常的な次元での行いから脱していないでいること。

柴（まき）・米・油・塩・味噌・酢・茶といった日常生活の七つの必須事項として挙げられているように、中国では、文人の間で喫茶聯句など優雅な喫茶も行われていたが、しかし、渴きを癒すことは、今でも中国人の喫茶の主な目的であろう。そして、そういう喫茶の利便性を求めて、明時代から、団茶からの粉末茶を使用する喫茶法がだんだん廃れていて、代わりに葉茶を使用する煎茶法が流行ようになった。中国では、唐、宋の時代には一時的に闘茶も行われ、なお喫茶は修道する者の神仙境界を彷彿する方便ともされていたが、しかし、中国の茶道は、ついに非日常の次元でのルールが完備された遊びまで発展しなかった。

二 朝鮮半島における茶道の受容

1 「茶道面」の語について

朝鮮の茶道に関して、今のところ、これといった研究はなく、資料集的には参考になるのは、金明培『韓国の茶道文化』（ペリカン社 1983年）だけである。

金明培氏は、茶道が日本独特の文化であるという説に反対し、さらに「茶や茶種、飲茶の風習が中国から伝来したとって、茶道の成立も中国が先であったと断定することはないのである」と指摘した上で、新羅の花郎が喫茶用の櫻筒を製作したことをもって、茶道の創立は韓国が先だと主張している（『韓国の茶道文化』 50頁）。しかし金氏がその論を立証するために使用した史料は、同時代のものではなく、すべて 11世紀以降の史料に載せられた伝説で、どこまで信憑性があるのか判断しがたいものである。また、たとえそのすべてが真実だと認めたとしても、喫茶用の櫻筒を製作したということだけを根拠に、最初に茶道が創立されたのは韓国だというのは、どうも無理があるように思われる。

また、金明培氏の話によると、韓国で「全羅南道羅州郡茶道面」という「茶

道」の語をもって名付けた地名があるという（『韓国の茶道文化』 11頁）。金氏はこれを氏の茶道韓国起源論の根拠としているが、しかし、この「茶道面」という地名はいつ頃から使われ始めたものであるか、明確に記していない。そこで、調査したところ、「茶道面」という地名があることは確かだが、それはごく新しい地名で、1914年に行政区域改編が行われた際、「茶庄面」と「道川面」を合併させた後の新地名として、付けられたものであることがわかった。つまり、もとの地名の頭字をそれぞれ取って「茶道面」という新たな名をつけたのである（韓国羅州市ホームページ <http://naju.jeonnam.kr/sup-01-02-13htm>によるもの）。この「茶道面」という地名は、われわれが論じようとする「茶道」の語と全く関係なかったことは、自明のことである。

2 韓国茶文献における「茶道」の用例

朝鮮半島茶関係文献における「茶道」の用例は、十九世紀以降でないと、見当たらない。しかもその用例も中国茶書をそのまま移したものだと考えられる。

例えば、十九世紀初期頃に艸衣禪師が著した『茶神伝』の「茶衛」の項について、金氏が次のように日本語訳をしている。

茶を造るときは精誠にし、蔵えるときは乾燥するようにし、泡を扱うときには清潔にすべきである。精、燥、潔であれば、茶道は尽きるのである（『韓国の茶道文化』 381頁）。

『茶神伝』の「茶衛」の項に注はない。しかし、これは明らかに艸衣禪師自身の考えではなく、「造時精、蔵時燥、泡時潔。精、燥、潔、茶道尽矣」という前掲の張源の『茶録』にある文言をそのまま引用したものにちがいない。

いまのところ、朝鮮半島の茶文化に関する史料は極めて少ないし、金氏がその著書の中で紹介した史料を見る限り、その内容は、ほとんど陸羽の『茶経』をはじめとする中国茶書の記述をそのまま引用したものばかりである。同じく『茶神伝』の「投茶」の項に記された茶の入れ方や、「飲茶」の項に記された茶会の客数のことなど、みな張源の『茶録』をはじめ明代の茶書の内容をその

まま移しただけで、喫茶用の水に関しても、「山水が上等、江水が次等、井水が最下である」という『茶経』にある文言をそのまま引用し遵守している。

3 朝鮮の茶道の独自性

右、『茶神伝』のような十九世紀の茶書でさえ、中国茶書の記述をそのまま引用したものが多いことから考えると、朝鮮の茶道の独自性がどれほど明らかにすることが出来るのか、現段階では不明である。

日本の茶道のなかでは高麗茶碗などが極めて珍重されてきたし、茶室の構造が朝鮮の民家からの影響説もあるが（中村利則「待庵原像」、『別冊太陽 利休の茶会』平凡社 1990年；同氏「茶室『待庵』が語る真実」、『歴史街道』74号 1994年）、しかし、だからといって、これは朝鮮の茶道が日本の茶道に影響を与えた証拠とはならないのである。なぜかといえば、その日本茶道で使われた高麗茶碗は、朝鮮半島で茶に使われたかどうか定かではないからである。例えば、有名な井戸茶碗は元々ただの飯碗であった。それに、中国茶文化が日本に影響を与えるには、必ずしも朝鮮を経由するとは限らない。したがって、朝鮮の茶道の独自性をより一層明らかにするためにも、今後、右に挙げていたような史料だけではなく、更なる史料の精査と検討が必要であろう。

三 日本における茶道の受容

1 日本の文献における「茶道」の用例

周知の通り、『日本後紀』によれば、宝亀年間に入唐し、805年に帰朝した僧永忠（743—816）は、806年に嵯峨天皇に献茶をした。ちなみに陸羽（732—804）が『茶経』を著したのは781年のころとされている。つまり、永忠の在唐留学の30年の間は、ちょうど陸羽が最も活躍している時期でもあった。したがって、茶道が永忠をはじめとする留学僧などによって日本に将来された可能性は、極めて高い。

このように、茶道の内容は、遅くとも 9世紀頃からすでに日本に伝えられたと推測することができる。しかし、当時それと共に「茶道」の語も日本に伝えられたのかどうか、現在、史料で確認することはできない。

時代は下り、16世紀頃になってやっと「茶道」の語が文献に現われてくるが、しかしそれは「茶堂」の語と同じように、単に茶の事を司る役である「茶頭」という名称の当て字にすぎなかった。

例えば、『信長公記』巻八に「御茶之湯之事」とある。これは、信長が天正 3年（1575）10月 28日に妙光寺で京都と堺の茶人を招いて催した茶会の記録である。その記録には、座席の飾りや道具の取り合わせを記した後、「一 茶道者 宗易」と書かれている。これは、宗易即ち千利休が信長の「茶頭」であることを示すものである。

しかし、17世紀中後期頃になると、例えば、寛永 17年（1640）の成立とされる『長闇堂記』（『茶道古典全集』第三巻）に

儒・釈・道の三教は、この位をのそみてその心をみかきもとむるのおしへ也、萬の道のおきて、心のうへをときて形の上にあらず、形を正しくする事ハ、其心へひゝかせんとのかた也、茶湯の道をしらすといへとも、いたりし上ハ、皆心の作の吟味なるへし、此ゆきやうをしらぬ人の、只茶湯ハ^茶さ^湯た^方うかた炭花の細工に手きゝ上手なれハ、数奇者の名これより外の儀なきとのミおもひて、朝夕そのしかたをかゝさんとする人あらん、それハ此道の形をとりて、心を捨たるゆきやうなれハ、さたう奉公などのそむにハよからん歟、茶湯者とハいつくをいふへきそ、たたし世間の茶事する人、十に八九は形くみのゆきやうなれハ、そのつれの目に、下手上手のせんさく、ほめらるゝほとうらめしき物ならんやとかたり申されし、誠に一道に達せしうへハ、いつれもおなし事と見へたり、かやうの心ある人に、あはれ、茶道かたりたくおもへる也

とあるように、日本では、喫茶の作法的な規範や精神的な理念を含む語として、「茶道」が、日本では初めて使われる。さらに、元禄 3年（1690）になって世間に現れた『南方録』の「滅後」に

カヤウニ思フモ茶道ノ執著ナリ

必茶道ノ守神トナルベシ

とあり、18世紀頃に著された『茶話抄』（『茶道古典全集』第十巻）の添書の部分には、

凡茶道之奥儀一二句に云尽せり、

夫茶道在心不在術、在術不在心、心術双忘、一味常顯、是茶道之妙道也などとある。これらの用例は、「茶道」が史料上に姿を見せる早期の例であろう。

それまでは、『烏鼠集』（今日庵文庫）巻三に「見合、心きくと云事、茶湯道の肝心也」、『山上宗二記』（『茶道古典全集』第六巻）の冒頭部分に「茶湯道繁昌也」などとあるように、喫茶の作法的な規範や精神的な理念を含む語として「茶道」ではなく、「茶湯」や「茶の湯」、或は「茶湯道」などの言葉が使われていた。現に右の『長闇堂記』の中で「茶道」と共に、「茶湯の道」の語も使われている。実際のところ、『長闇堂記』『南方録』『茶話抄』では、「茶道」の用例は右に上げた箇所だけであって、むしろ「茶湯」「茶の湯」「茶湯の道」「茶湯道」といった言葉が圧倒的に多く使われている。

18世紀中期頃から今日に至って、日本では「茶道」という語が、「茶湯」或は「茶の湯」の語にとって代わって、最も一般的に使われたように見える。しかし一方、「茶湯」「茶の湯」の語もまだ根強く生き残っている。「茶湯」と表記する場合でも、ほとんど「ちゃのゆ」というふうに使われている。

2 「茶の湯」の語意の変遷

「茶の湯」の語が日本独自の喫茶文化の代名詞として定着するまでの語意変遷について、詳しくは拙著『茶道と茶の湯—日本茶文化試論—』（淡交社 2004年）を参照願いたい。以下、その結論を概説しておく。

日本では、「茶湯」の語が平安時代から既に使われ始め、16世紀頃までは、主に「茶を材料にして作られた湯」、「茶をいれる為の白湯」、「茶と湯」という三つの意味として使われてきた。

16世紀頃以降、「茶の湯」を喫茶文化の専門用語として定着されつつあるよ

うになり、それを専門に論じる茶書も徐々に出版されるようになった。当時、「茶の湯」といえば、おおむね蔵茶・喫茶の作法的な規範と精神的な理念を含んだ言葉として、一般的に使われていた。つまり、「茶の湯」は「茶道」の原意に一番近い語として用いられるようになった。

17世紀後期には、「茶の湯」の語で表現されるところの内容にさらに大きな変化が見え、日本人独特の創意が多く付け加えられるようになった。即ち「茶の湯」では、茶道の原意に含まれた製茶の内容がほとんど略され、その代わりに初座（主に懷石のもてなし）・中立（暫時休息）・後座（喫茶）という茶事の基本型を確立させ、さらにその独自の「湯相論」即ち茶趣論を展開させたという点である。

これを詳しく論じたのは『南方録』であった。『南方録』の中では「茶湯」を深い道理の含まれている語とし、「茶道」の語より、むしろ「茶湯」のほうを好んで意識的に使おうとしている。例えば、『南方録』の「滅後」に次のような逸話が記されている。

南方宗啓が五月雨の頃に利休を招いて風炉の茶事をしたときのことである。茶を茶碗に入れたあと、水指の蓋を作法どおりに取ったが、冷ややかな天気だったので、水を指さずに茶を立てた。茶が済んだ後、「何トテ水ハサ、ズ候ヤ、忘ザル証拠ニハ水サシノフタ取タリ、マスマス不得心ノコト也」と利休に散々に叱られた。叱られた南方宗啓はその叱られた訳を利休に聞いたが、同席した津田宗及と山岡宗無に聞いてくださいといわれ、そこでその兩人に尋ねるところ、「暑甚シキ時トハチガヒテ、今日ノ天気ニハサ、ヌモ一理アリ」等の答えが返ってきた。

そして津田宗及と山岡宗無が帰ったあと、南方宗啓が利休の袖を引いて改めてその理由を尋ねてみた。すると、南方宗啓の問いに対して、利休が次のように答えた。

休ノ云、兩人ハ世ニ知ラレタル茶人ナレドモ、奥旨ニ於テ不煅煉ナリ、ソモソモ茶ノ湯ト云名ハ何ノ為ニツケ候ヤ、茶ト湯ノ相応第一ナリ、草庵ニテ初座ノ火アイヲカンカヘ、後座ノ湯アヒニ応シテ座ニ入、茶ニ逢ヲ功者ノ客ト云、又其客ニ応シテ、湯アヒ・火アヒ相当シテ、茶ヲタツルヲ功者

ノ亭主ト云也、口切ヨリ正二月マデハ、茶ノ氣ツヨクタモチ候ヘドモ、凡三月半末ヨリ、少ヅツ氣ヲトロヘ、四月ニナレバ弥氣ウスク、五月雨ノ節ナドハ以ノ外ニ衰ルナリ、ソレ故、五音ノ湯アヒノ内、タウゲノ松風ヲ口切ノ湯アヒ、正二月ニ至テハ雷鳴ノ熱ヲコヘテ、漸々ニ其心得ヲスベシ、四月已下、茶ノ色香トモニヲトロヘタルニ、湧立タル峠ノ湯ヲ打込候ヘバ、茶ノ氣タチマチヌケ、色香モカハル也、ソレ故、風炉ノ湯アヒハ熱タチタル湯ニ水ヲ一ヒサク打入、汲タテ、一声ノタルミヲ茶碗ヘ入候ヘバ、湯アヒヤハラカニシテ、茶ノ氣ヲタスケ相応スル也、炉ニテ夏ノ会スルモ同前、コレハ台子ニテ秘伝ニシキタリタルコトト紹鷗被申シ也、炉ニテ冬ノ茶ノ湯、暁ヨリアラタメカケタル湯、サシソヘサシソヘイカニモ湯ノネレタルガヨシ、又夏ノ茶ハ、氣ヲトロヘタル故、練レ過タル湯ハ、氣ウモレテアシ、ソレ故、客前ニ水ヨリワカシ、其ワキ立タルニ水ヲサス心得ナレバ、湯味カロクシテ、茶ノ氣ヲ発スルナリ、コレホド意味浅カラヌコトナルニ、暑氣ヲサンズル為ナド心得候ハ、大ナル不心得ナリ、アル時、休ガ宅ヘ施薬院茶申ケル時、火アヒ・湯アヒト云コトヲ尋ラレシユヘ、此アラマシ御物語申ケレバ、尤至極ノコト也、医ノ方ニ、文火・武火薬ニ依テ用、寒飲熱用、熱飲寒用ナド云コトモ、ミナ湯薬ノ相応也、休ノ茶ハサホドマデ煅煉ノコトナレバ、茶ノヨキノミナラズ、服用シテマコトニ仙薬タルベシト感セラレシナリ、サテコソアサアサシキヤウナル名ナレドモ、茶ノ湯ト云名、深々ノ道理ヲフクメルト知ベシト云々、ソレヨリマスマス此心ヲ專ニシテ見来レバ、炭ノ次第ヨリ始テ、一座一会ノ心、只コノ火相・湯相ノミナリ、

ここで述べられている内容は、釜の湯音に関しても、すでに陸羽の『茶経』の頃から言われているものであるし、「松風」や「雷鳴」などの釜の湯音をいう言葉も、実際、中国で使いはじめた表現である（布目潮風・中村喬編訳『中国の茶書』182頁、平凡社 1976年）。しかも張源『茶録』の記述はこれよりもっと詳しく、さらに漢方薬を煎じる火相などを引き出して説くところをあわせてみると、一見まったく中国のそののコピーとも取れる内容ばかりである。

ところが、「ソモソモ茶ノ湯ト云名ハ何ノ為ニツケ候ヤ、茶ト湯ノ相応第一

ナリ、草庵ニテ初座ノ火アイヲカンカヘ、後座ノ湯アヒニ応シテ座ニ入、茶ニ逢ヲ功者ノ客ト云、「茶の湯ト云名、深深ノ道理ヲフクメルト知ベシ」ともあるように、「茶の湯」の名は軽々しく付けられたものではない。「茶の湯」という場合、ただ単に茶を材料とした飲み物の意味だけではなく、むしろ茶と湯とがいかに調和するかが最も大事なこととなっている。限られた時間と空間の中で、その茶と湯との調和を実現するために、点茶者個人の技術的な力量が必要とする一方、点茶者と喫茶者との心の感応のある立ち居振舞いすべてが必要不可欠となる。「茶の湯」のもつこのような考え方は、中国茶道にはなく、まさしく日本の「茶湯」あるいは「茶の湯」の独特な内容である。このような考えが熟した時期は、やはり『南方録』が世に現われた元禄時代であろう。

もちろん、中国の茶道でも、「火相」と「湯相」は極めて重視される場所である。例えば、『茶経』のほか、唐代の蘇廣が著した『十六湯品』（布目潮風『中国茶書全集』）や張又新が著した『煎茶水記』（布目潮風『中国茶書全集』）、明の田芸衡が著した『煮泉小品』（布目潮風『中国茶書全集』）などのような、「火相」と「湯相」を専門的に論じる茶書さえあるほどである。しかも、中国の茶道の場合は、「火相」と「湯相」を整えるために、いろいろな知識などが必要とされる。とはいえ、結局それは客とは関係なく、亭主の力量次第で十分できるものであった。

一方、「茶の湯」の場合は違う。「茶の湯」では、亭主としての力量も絶対必要であろうが、むしろ、亭主一方の努力だけではなく、客も修行を積む必要があるとされている。「根本露地ノ茶ノ本意、湯アヒ・火相・三炭ノ次第」だから、火相と湯相を常に最高の状態に保ち、一座を建立するためには、亭主だけではなく、客も「主ノ心ヅカイニ感ヲオコシ」、つまり主客の心が常に感応しながら立居振舞をすべきである。修行を積んだ主客同士は、互いに心で感応し合って初めて最高の火相と湯相を整えることができ、最高の茶趣を楽しむことができるとしている。（『南方録』「滅後」）

このような火相・湯相を論じたのは、『南方録』が最初であった。従来、日本の茶道の性格を論じる場合、よく「社交的なもの、修行的なもの、芸術的なもの、儀式的なもの」であるとか（谷川徹三『茶の美学』日本叢書 1945年）、

「不均斉、簡素、枯高、自然、幽玄、脱俗、静寂」の七つを茶道の特色として唱えたり（久松真一『わび茶道』灯影社 1987年）、寄合性などを取り上げたりして論じられてきた（林屋辰三郎「茶寄合とその伝統」『文学』一九の五、1951年。のち『中世文化の基調』東京大学出版会 1953年に収録）。これらの論述は、日本の茶道の特色を論じるより、むしろ日本の茶道に対する意味付けをしようとする試みというべきであろう。実際、これら日本の茶道の特徴とされる点は、中国や朝鮮の茶道にも見い出せるものばかりであって、必ずしも日本の茶道に特有のものとはいえないのである。つまり、『南方録』で展開された「湯相論」こそ日本茶道にしかない特色というべきなのである。したがって、「湯相論」の完成をもって、今日いう日本の茶道の完成とみる場合、茶道が中国から日本に伝えられたのを九世紀頃とするならば、十七世紀頃は即ち、日本独自の茶湯文化が誕生し一人立ちすることを告げようとする時期だったといえよう。

3 日本の茶道の独自性

日本の茶道の独自性は、主に二点指摘できよう。

一、いまだに根強く生き残っている「茶の湯」の語に象徴されているように、日本の茶道の点前作法そのものは独自のものであった。寄合、非日常、虚構、湯相火相といった語は、日本の茶道の独自性のキーワードとなるであろう。

二、日本の茶道は世界的にみても類を見ない遊びである。日本の茶道の内容はあまり広範にわたり、建築、庭園、書画、陶磁器、竹器、漆器もあれば、生け花、香道、料理、礼儀、点前作法などもあり、ほぼ日常生活の各分野のことをすべて内包している。そして、道教、陰陽道、儒教、仏教、神道、キリスト教などの思想を一身に集約させ、それぞれ建築、庭園、書画、陶磁器、竹器、漆器、生け花、香道、料理、礼儀、点前作法などの諸方面に体现されている。日本の茶道は、常に日常性と虚構性の狭間に存在し、しかも多くの場合は日常生活を虚構化して非日常性の次元で他界の遊戯として楽しまれている。このような総合生活文化としての茶道そのものは大切な文化遺産である一方、建築、庭園、書画、陶磁器、竹器、漆器などの多くの有形文化遺産だけではなく、家

元制度など無形の文化遺産の伝承保存にも大きく貢献している。それによって、日本人に一貫したアイデンティティー（identity）をもたせるために、大きな役割を果たしてきた。日本の茶道には、日本人として日本の社会で生きて行くための智慧がたくさん潜んでいる。だからこそ、今日までこよなく愛され続けてきたのであろう。こういう日本の茶道の独自性から日本人の国民性の特徴もたくさん見えてくる。

おわりに 東アジアの茶道と西洋の紅茶文化との比較

以上、「茶道」と「茶の湯」の語の考察を通じて、東アジア諸民族の共同文化遺産である喫茶文化の中日韓三カ国における「普遍性」と「独自性」を簡略的に分析した。

最後に、世界的な視野から、東アジアと西洋の喫茶文化の異同についても、簡単に述べておきたい。

まず世界の喫茶文化の共通点について、二つ挙げよう。

一、「茶」の語の発音はみな中国語をルーツとしている。

世界の東西に関わらず、現在「茶」を意味する世界各国の言葉は、中国の広東語の CH`Aと福建語の TAYの二系譜に従って、大きく二つのグループに分けることが出来る。広東語の CH`Aに属するものとして、日本語の茶（CHA）、ポルトガル語、ヒンズー語、ペルシア語の CHA アラビア語、ロシア語の CHAI トルコ語の CHAYなどがある。一方、福建語の TAY（Tɛ̃）に属するものの系譜としては、オランダ語の THEE ドイツ語の TEE 英語の TEA フランス語の THÉなどがあるという。（角山栄『茶の世界史』12頁、中央公論社 1980年）

二、茶の利用方法において共通していること。

茶は 17世紀はじめからヨーロッパへ輸入され始めるが、世界の東西に関わらず、茶の利用はみな薬から飲料へという道程をたどっていた。茶の原産地で喫茶文化の発祥地でもある中国でもそうであるし、喫茶を遊びまで発展させた日本でも然り、緑茶に対して紅茶が愛飲されているヨーロッパも例外ではなかった。

次は東アジアと西洋の喫茶文化の相違点についても、二点挙げよう。

一、愛飲の茶が異なる。

西洋では紅茶が最も愛飲されているのに対して、東アジアでは、完全発酵の紅茶のほか、ウロン茶など半発酵の茶、とくに発酵しない緑茶が最も多く飲まれている。

二、喫茶文化の成長経緯と質が異なる。

東アジアでは、茶道は東アジア諸民族が友好的な文化交流の賜物であり、平和のシンボルといっても過言ではない。例えば、東洋文化の精華とまで称えられている日本の茶道には、東アジア諸民族の作り出した文化をいろいろな形に凝縮して表現されている。また日本の茶道の場合、茶はたんなる飲み物としてではなく、その飲み方が一種の儀礼として、宗教的な神秘性と社会的な倫理性を同時に持ち合わせている。

一方、西洋とくにユーラシア大陸の西の端に位置するイギリスで定着する紅茶文化は、まさしく当時のイギリスにおける資本主義の発達によるものである。その特徴は、端的に言って紅茶に砂糖とミルクを入れる飲み方に象徴されるように、物質文化志向に見出される。それは遊びでもなければ、その飲み方に求道性もなければ芸道の香りもない。茶にミルクを入れて飲む方法は別に東アジアでも珍しくないが、しかし「紅茶に砂糖を入れる飲み方はイギリスの独特の飲み方」だそうである（『茶の世界史』91頁）。その「飲茶に欠かせなかった砂糖は最初のうちは高価な贅沢品であったが、十八世紀中頃には、誰もが容易に手に入れることができる大変化された商品になっていた。しかもそれはイギリス人にとって西インド制覇を象徴する栄光の商品にほかならなかった。しかしその栄光の商品は虐げられた奴隷の血と涙が結晶したものであった」。（『茶の世界史』100-101頁）そして、19世紀頃、イギリスは、飲めば飲むほど健康になる生活必需品の茶を中国から輸入する一方、吸えば吸うほど体を衰弱させるアヘンを中国に運び込んでしまった。つまり、紅茶文化の繁盛は、中国人の健康を犠牲にして維持される時期もあった。

たった一片の2、3センチの小さな茶葉は、地域文明だけではなく、世界文明にも大きな影響を及ぼしてきた。人によって、お酒に酔ったら失礼な言動に

出るかもしれないが、しかし茶道での喫茶は和気藹々のムードが盛り上がるだけであって、喧嘩する心配はない。緑は平和の色である。どうか一碗のお茶を頂く和の心を以て、人々と仲良く付き合い、世の中を明るくしていこう。